

Curious Eyes of a Witch

プロダクトと建築、デザインへのこだわり

自分が思うものをデザインして製品化する

黒川 雅之

建築家・デザイナー



仁木 洋子

空間演出プロデューサー



建築家とプロダクトデザイナー、そのふたつの関わり

仁木 私は、黒川さんのプロダクト作品としてあまりに有名なgomシリーズの四角い灰皿に、日々の時計やプレスレットなどを入れて、30年近く使っています（笑）。

最初に、プロダクトデザインと建築家のお仕事との関わりについてお伺いしたいと思います。

黒川 僕が事務所をはじめ今年で47年目、半世紀も仕事をしているので、忘れてしまったモノもあるくらい膨大な数になりました。

30才の頃は、僕も時代も夢多き時代だったんです。建築が激動し、大学4年のときに、建築が都市になること、建築が産業になること

を予言していました。今は当たり前ですが、当時、建築と都市は別で、建築自体が都市になる、まさに超高層時代や新宿駅などのように建築そのものが都市になるという時代でした。当時、建築はクライアントによって依頼され1対1で実現していく時代から、建築を買う時代が変わり、マンション時代、工業製品化したハウスメーカー時代の予言だったと思います。

そこで、僕の人生は建築を真ん中に置いて、都市と産業化の2つの包括した姿勢で人生を歩んできているんです。都市では大きな建築を含む地域計画など、産業化は、建築の産業化だけではなく、テーブルや家具、プロダクト製品も包

括して、全部一つのものとして捉える。「僕はレオナルド・ダ・ヴィンチになる」と言っていました。

仁木 すごいですね、今は、若者が大きな夢を描き難い時代だと言われますが…30歳で壮大な夢を描き、それを次々と実現し続けていらっしゃいますね。

黒川 レオナルドの時代はまだ建築の原型の時代で、その中に絵画も彫刻も家具もプロダクトも全部包括していました。近代になり、絵画、彫刻は独立し、それからインテリアや家具、プロダクトは新たなデザイン領域へと、建築から分離し自立していくんです。ある意味建築は大地から自立したメッセージになり得たんですが、同時に大切な子供たちを失ってしまうんです。それで僕は、もう一度僕の中で統一したルネサンス時代の建築を目指すというのが、30歳のときの夢だったんです。

仁木 日本人は、自分でジャンルを狭くしすぎる傾向がありますね。欧米では、いろいろなデザインをすることが普通にできます。

黒川 僕は、方針を変えないでずっときています。それと、組織事務所にならないということを目



gomシリーズ ashtray 1973 pen 1992 / 40年の歴史をもつゴムを主役に部分的にステンレスを使ったインテリア小物

分に決めたくて。ものづくりができるのは10人前後だと、だから、ずっと10人前後でやっていますよ。仁木 黒川作品に脈々と流れるデザインのDNAや精神が感じられる理由はそこにあるのではないかと思います。

黒川（笑）兄の黒川紀章は、そういう僕に憧れていましたし、「羨ましい」と言っていました。

仁木 それぞれ別の個性が光るお二人のご両親はお幸せですね。

黒川 そうでもないんですよ（笑）。父は建築事務所をしていましたが、「建築事務所は一代限りでいいんじゃない」といって兄も僕も後を継がず…寂しそうな顔を



CHAOSチタン素材ダブルフェイス 1996

していました。今は3男坊が継いでいます。

4つのKシステムと称する仕組み

仁木 すごいと思うは、4つのKシステムをお持ちだということです。

Kデザインという「デザインとプロデュースの会社」、デザイントープという「情報システムの会社」、そして、松屋銀座7Fのデザインコレクションでもみられる「製造と販売の場」としての株式会社K、それから「交流と研究の場」としての物学研究会。4つ…をどのように展開されているのでしょうか。

黒川 昔の建築家は、自分の建築の中に自分のデザインした家具などを置きたがったんです。家具が建築の一部だったんです。しかし、家具は自立しましたから、建築と家具は等価なんですよ。僕は、建築のなかに置くことを意図してはいないんです。そういう発想だから、家具を、他に売るといふ考えが成立します。

同じように、情報も建築だと思っているんです。昔は住んでみなければ良さはわからないものでしたが、建築が大地から遊離し飛び立って、メッセージとして言語になってしまうと、パリの建築が雑誌に載って届いても、「い

い考え方をもった建築だなあ」と、住みもしないで建築を評価できるようになるんです。これが建築がフリーになった、実記性をもったと表現できると思います。建築自体が情報化されたから「情報システムとしてのデザイントープ」では、より多くの人たちと意見を交換する場、若いデザイナーがそこで育つようにと、つくったのです。仁木 土曜日には「K塾」も主宰され、若者や異業種の方々が集まり、垣根なしに、大先生である黒川さんとフランクにお話ができます。私も時々参加しますが、ご息もスイスからお帰りのときに、若手建築家のお一人としてお話をされていました。先生の周りでは若者が育っている…という感じで、素敵な集まりです。

次の世代に知恵を渡す

黒川 人間て、根本は育つ間にたくさん先輩に教わるでしょ。よく親孝行しなさいと言うけれど、孝行したいときに親はいないので、僕は、親孝行して親にはなく、次の世代にすればいいんだっていいですね。学んだことを次の

世代に渡すっていうのは人間の当たり前前の仕事なんです。事実、ゲノムって40億年前から今まで変革しながら生き続けているんです。

人間らしい生き方というのは、次の世代にゲノムを、知識を渡すことだと思います。冗談で、知識で頭が重くて三途の川を渡れないから、身を軽くして逝くんだって言っていますね(笑)。

仁木 私もK塾でお会いした方との新しい人の輪が広がっています。

黒川先生のDNAがご息子だけでなく、たくさんの方に受け継がれていくようで、素晴らしいです。

黒川 先日、三國連太郎が亡くなって、息子の佐藤浩市がインタビューに答えていましたが、「父親としての三國連太郎について」聞かれたときに「それは勘弁してください、私にとって三國連太郎は俳優である」という表現をされていました。それで、僕は三國連太郎の生き様、息子に対する姿勢というものがみえたんです。

息子や社員にも、やさしくすればいい建築家やデザイナーが育つかというところではない。時には蹴飛ばし、背中を叩き、崖から蹴落とす

という厳しさ、自分を乗り越えていく、挑発かつ、挑戦していく心を見せられるか、とても難しいことです。建築学とは人間学だと気づいたのは、30才のころで、いい建築をつくるためにはいい人間になるしかない。深い意味でいい人間にならないと、と思います。そのためには、自分を鍛えるしかないはずと思ってきました。ただ、いい人というのは、鍛え足りない、単にやさしいだけになりますから、それは本当に難しいことです。

仁木 とても心にしみるお言葉です。嫌われたくないから…やさしく指導する親や教師、そして、上司が多い時代です。

デザイナーは、自分をしっかりもってデザインし、自分に妥協しない強さや厳しさが要ですね。

「中国人を愛する」ビジネス

仁木 最近は中国でもご活躍ですが、気持ちよく、軽やかにされていらっしゃる感じます。

黒川 僕は好奇心の塊ですから、中国のことは十数年前から好きで、上海蟹のシーズンになると友人へ連絡して食べに行っていました。



友人は、僕がくるからとメディア陣を集めて取材のセッティングをしたりしていましたが、ビジネスはしていませんでした。

Kという会社をつくったときに、海外にも売ろうと、当然のように中国への販売も海外販路の一つとして登場してくるんですが、それを聞いた僕の親友たちは、全員が反対しました。

仁木 そうですね。

黒川 その助言を聞かずに中国でビジネスをはじめましたが、最初に決めたことがあるんです。

「中国人を愛する」ということです。学校の先生が生徒を愛すると決めるのと同じように、あるコミュニティに参加するときに、「このコミュニティはどのような連中だろう」

ではなくて、「いい連中で、愛すべき人たちだ!」と決めたんです。

仁木 相手に伝わりますね。騙されるんじゃないとか、と思って接したら、それも伝わります…。

黒川 だから誰にも騙されたことはないですし、いじわるされたこともない。最大限の愛情でみんなが僕を迎えてくれます。人間は誰でも信頼すると信頼してくれますよ、ものすごく単純なことです。

人と人との関係の大原則です。

人間は、無知から憶測をはじめます。たとえば、福島の子力発電所が水素爆発したときに、欧米では、日本中が汚染されたと思っていました。中国の鳥インフルエンザだって、上海から内陸に感染者が広がりましたって、中国中を大きく塗りつぶされて示してましたけれど、30人くらいですよ。ニュースというのは、そこに焦点を当てて、拡大します…。

仁木 あの頃は、私もイタリアやドイツの友人から「すぐ!こっちに来て住みなさい…」というメールももらったものです。

これから中国に進出する方へ助言があれば?



White Box Gallery Shop 2013 / 北京のギャラリー街「798芸術区」にあるギャラリー

黒川 僕のやり方を薦めます。信じてもらいたかったら、信じなさいということです。悪い奴は中国にもいっぱいいるよ、でも日本にもいるよね…と。人口が多いんだから、日本の10倍くらいいると思っていたらいいんじゃないってね。(笑)

文化的な背景が違いますから、当然、軋轢があるかもしれませんが、中国とうまくやっていけないなら、これからアラブ、イスラム系、アフリカなど、さまざまな人たちとやり取りする日は、すぐに来ますよ。

仁木 そうですね。facebookなどの環境もちょっと前は、考えつかなかったことでものね。

黒川 人間のことだけを考えていくと、国という概念が邪魔になります。だから僕は文化圏で考え、中国では「僕はアジア人です」といいます。でも生まれたのは日本ですから、故郷を愛していますとね…。

僕の一番上の息子がマダガスカルに住んでいるんですが、「ついに結婚した、27才違う…」と言うんで、羨ましがっていたんですよ。連れて来たら、フランス語とマダ

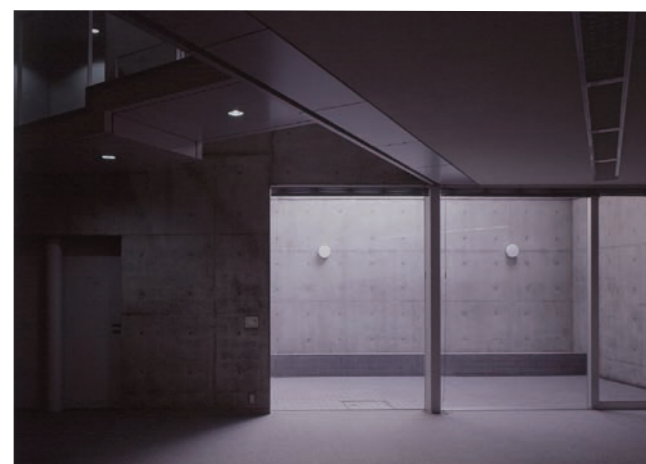
ガスカル語と日本語を話す、性格のいい、マダガスカル人の真っ黒な娘さんでした。半分驚きながら、文化が混ざっていく、グローバルになっていく時代を僕の家庭の中で身近に体験しはじめています。好奇心の塊ですから、非常に面白がっています。**仁木** 今日は、見え方や存在感が変わってくるような素敵なお話をありがとうございました。

黒川 雅之 Masayuki Kurokawa
建築家・デザイナー

1937年名古屋生まれ。黒川雅之建築設計事務所、物学研究会、デザイントップ主宰、K&K CEO。京都精華大学、名古屋造形大学、中国・復旦大学の客員教授。金沢美術工芸大学芸術博士。著書に「ARCHIGRAPH 黒川雅之×稲越功一」(TOTO出版)、「デザインの修辭法」(求龍堂)、「八つの日本の美意識」(講談社)など。毎日デザイン賞、グッドデザイン金賞、ドイツIF賞など多数受賞。パーマネントコレクションは、N.Y.MoMA、デンバーミュージアム、メトロポリタンミュージアムN.Y.など多数。www.k-system.net

仁木 洋子 Yoko Luna Niki
空間演出プロデューサー

熊本市生まれ。多摩美術大学卒業。(社)日本空間デザイン協会副会長。世界のモーターショーブースデザインやさまざまな空間の演出、プロデュースを行なう。地球環境・資源保護に配慮したその仕事は、欧州でも評価され国内外で積極的に活躍。2006年から東京・丸の内・有楽町で毎年12月に開催のチャリティ「ライティング・オブジェ」展を主催。2011年からは、東日本大震災復興支援として、「ライティング・オブジェ in 福島」も開催。2012年7月明治神宮「明治天皇百年祭」の夜間特別参拝の空間演出デザインを行なう。www.illuminat.co.jp



パロプラザ 1993



花陰 Hanakage 2006 / イタリアンレストラン